



2009～2010年度 綾瀬春日ロータリークラブ週報 第847～852回卓話

■ 5月26日 第847回卓話

保険を教えます

三井生命株式会社 田舎雅之様



1. 退職所得と給与所得

日本の所得税は「超過累進課税制度」となっているので、課税所得金額900万円を超えると所得・住民税率が43%、1800万円を超えると税率50%の課税がされます。

これに対して退職所得は、退職所得控除（勤続年数20年までは1年あたり40万円、20年を超えると1年あたり70万円）後所得の2分の1に対して分離課税することになります。

従いまして高い報酬を受取る経営者・役員の方などは、報酬の一部を将来にわたって積み立てておき退職所得（退職金）で受取るといった手法を取られるのがお勧めです。

例えば、年収（ここでは課税所得額）2400万円の社長様（退職時役員在任年数30年）が400万円役員報酬を10年間減らし（合計4000万円）、これを退職金として受取った場合には371万円の税金で済みますが、報酬として受取っていた場合にはこの合計4000万円部分には2000万円の税金が課される事になります。その差は1629万円となります。

また、そうは言いましても会社の金庫（銀行口座）に積み立てておくというのも現実的ではありませんので、生命保険会社の保険を活用して備えるというお手伝いしております。

2. 相続対策としての生前贈与

よく、資産家の方が相続対策として生前贈与をす

るという話を聞きます。

多いのが、年間110万円までは非課税なので111万円を贈与し1000円納税（110万円を超える部分にはこの場合10%課税）という話です。この方法は資産の多い方については必ずしも正解ではありません。

例えば相続財産5億円（法定相続人が妻と子2人、法定相続分通りに相続の前提）の場合、一次相続（夫→妻と子2人へ）・二次相続（妻→子2人へ）の相続税合計は9850万円と相続財産の19.7%を税金として納める事になります。

では年間200万円生前贈与した場合はどうでしょうか。この場合は9万円の贈与税がかかりますが、200万円のうちの4.5%にすぎません。

300万円の生前贈与では19万円の贈与税で300万円に対して6.33%、500万円の生前贈与では53万円の贈与税で500万円に対して10.6%となりますので財産の大きい方は500万円の生前贈与でも有効となります。

相続対策というものは、制度をよく知り、こうした小さな対策の一つずつ積み重ねていく事が大切です。

■ 6月3日 第848回卓話

創立記念例会

～ オークラフロンティアホテル海老名 ～

■ 6月9日 第849回卓話

ベートーヴェンと第九について

澁谷敏夫 会員



クラシック音楽のコンサートは晴れのイメージですが、ベートーヴェンの第九は晴れの中の晴れだそうです。オーケストラに合唱が加わる第九は音楽の祝典みたいなものです。

ご存知の通りオーケストラだけでも弦楽器、管楽器、打楽器、それぞれ様々な種類があり、それぞれの個性が表れ、それらが一堂に会した上で、ソプラノ・アルト・テノール・バリトンの独唱者がいて、さらには合唱団が加わる。これはもう音楽にとって音楽仲間の全員集合なのです。ベートーヴェンが作曲して最初の呼びかけの歌詞もベートーヴェンが書いたものです。

『おお友よ、この調べではない！ もっと快い、歓びにみちた調べを歌いはじめよう。』

もちろんテキストの本体は、ドイツの国民詩人フリードリッヒ・フォン・シラーによるもので、人類愛を歌った内容になっています。初演は1824年（日本では徳川11代家斉の時代）5月7日午後7時からウィーンのケルトナートーア劇場だったそうです。

この時の有名なエピソードがあります。すでに聴覚障害は進んでいて、聴衆の喝采に気付かなかったベートーヴェンをアルト歌手のカロリーネ・ウインガーが客席の方へ向かせたのであります。

聴衆は4回もアンコールを繰り返し「Vivat 万歳！」という叫び声が止みませんでした。聴衆が5回目のアンコールを要求しようとした時、居合わせた警察官が「静粛！」と叫んで止めさせました。これは皇帝にさえ3回の喝采が通例となっていたので、不敬罪になると考えたからでした。ところが、5月23日に再び行われた演奏会は不入りでした。

ホールの半分も埋まらなかったのです。ベートーヴェンは既に53歳。この3年後、雪が降り雷鳴が轟いた日に「喜劇は終わった」と言葉を残し亡くなられたようです。

とうとうベートーヴェンが生きている間に、ウィーンでは二度と第九は演奏されませんでした。フランスのある音楽家が3年間練習を重ねフランス初演に挑みました。

これ以降毎年のようにベートーヴェンの第九を演奏し続けました。音楽とはやはり演奏であり、紙に書かれた楽譜は演奏の成果によって初めて音楽作品となるようです。



ここで少しベートーヴェンの人となりをお話いたしますと、

「彼はよくデイミュエンドを示すのに、だんだんしゃがんでいき、ピアノシモではほとんど指揮台の下を這うようにしました。音量が増すにつれて、あたかも舞台の仕掛けから飛び出すかのように伸び上がり、楽団がトゥッティになると、ほとんど巨人のように身を大きくして爪先立ち、両腕を振り回し、今にも大空に舞い上がろうとしているかのようであった。」ともの本に書いてあります。

彼が最晩年に達した心境を映した弦楽四重奏曲第16番の楽譜には、「そうでなければならぬのか」「そうでなければならぬのだ」とあります。また彼の恋愛に関する本は世界各国で何十種類と出ていて、どれが本当なのか実のところ分かりません。一つ言えるのであれば、彼は人妻に恋する癖があったようです。



それでは日本ではいつベートーヴェンの第九が演奏されたのでしょうか？

1918年（大正7年）6月1日6時30分、坂東俘虜収容所第一バラックでドイツ軍の沿岸砲兵中隊軍楽長ヘルマン・ハンゼンが指揮する徳島オーケストラの第二回シンフォニー・コンサートにおいてでありました。この演奏には俘虜80人の合唱団が友好出演しており、独唱者は当然の事ながら男性ばかりの志願兵ヴェーゲナー、後備水兵シュテッパン、志願兵フリッシュ、後備伍長コッホでした。なお前日の5月31日金曜日にはゲネプロが行われました。何故このような話をするかというのは、日本の第九初演は1924年（大正13年）11月29日に東京音楽学校奏楽堂で開かれた第48回定期演奏会である事が通説となっていたのです。事実は別として歴史的な話としてはこちらの方がとても良く出来ているのです。何故なら、第九初演から丁度100年目で、しかも場所は現在の東京芸大、頭の悪い学者がこじつけるにはもってこいの条件が揃っているのです。

それからもう一つ。1989年東西ドイツを隔てていた冷戦の産物「ベルリンの壁」が崩壊し、これを祝うために第九交響曲が演奏されたこの時、指揮者のレナード・バーンスタインはシラーの歌詞「喜び」を「自由」に言い換えて話題を集めました。それは12月25日に